

---

# 姫と三騎士と平民A【改訂版】

弓槻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

姫と三騎士と平民A【改訂版】

### 【Nコード】

N0538G

### 【作者名】

弓槻

### 【あらすじ】

僕の学校には、姫と三人の騎士が居る。そして僕は平民A。脇役中の脇役。舞台に出るのはほんの数秒。良くて数分。しかし、そんな僕を物語の主要人物にしたのは、艶めく長い黒髪と煌く紅い瞳を持つ、美麗の姫君 『日宮千歳』だった。完璧無敵万能超人だけでなく無表情の姫と、平々凡々月並みな平民Aこと僕。そして姫の護衛の美形三騎士。その他にも個性豊かなキャラクターが現れる。……こんな感じのラブコメディー。ちなみに、主人公は平凡とは思えない女顔ですが、自覚していないので『平民A』には変わりありません

ん。悪しからず。（本作は姫と三騎士と平民Aを改訂したものです。  
しかし内容はガラリと変わって原型をとどめていません）

## 第一話（前書き）

ついにやってしまいました、改訂版。

この忙しい時期に何やってんだお前と言われそうですが、我慢出来ませんでした。

つい最近、誤字脱字確認のために姫を半年ぶりほど最初から読み直すとしたら、序盤の文章がまあ稚拙な事。

これはもう納得できんと最初から書きなおした訳ですよ、ええ。

そしたら、内容まで変わりました。

とりあえず改訂前のも残しておきます。

それから、何かご指摘がありましたらよろしくお願いします。

前の方がよかった、今の方がいい、などの意見もよろしく願います。

それによって改訂版を書き続けていくか考慮しますので。

……と言っても七十七話まで書き上げるには数ヶ月必要でしょうがね。

ふふふ……（遠い目）

改訂版は物語の一区切りとして、秋と千歳の出会いまでのお話です。

それから先は不定期更新です。あしからず。

それでは、最近夕食がコンビニ弁当ばかりな弓槻でした。

## 第一話

とある高校の昼放課。そしてその学校の食堂。目の前には三人の美男子。そして僕の横には一人の美少女。

何が一体どうしたのか。……そんなの、僕が知りたいぐらいですよ。気が付いたらここにいて、衆人観衆の中で好物のオムライスを食べていたのだから。周りはひそひそうるさいし……。何だよ、僕が何をしたっていうんだ。凡人は食堂でオムライスを食べる事さえ許されないのか？ なんとまあ悲しい世の中になったものだ。……卑屈になりすぎた。やめよう。これ以上は自分がむなしくなる。

とりあえず、この状況を何とかしなければ。のんきに昼食取ってる場合じゃないぞ。

「あの」

「ぐああっ！ イツ、てめえっ！ 俺の皿にピーマン乗せるなっ！」

「えー、別にいいじゃん。リュウは好き嫌いないんだし。俺ピーマンだけはどうしても無理なんだよねー」

「じゃあ何でピーマンの肉詰め定食なんてものを頼んだんだお前はっ！」

「ピーマンの中に入ってる肉が食べたくて」

「それじゃあ肉詰めの意味がねえだろっ！ お前のせいで俺の皿の半分が緑になったじゃねえか！ ああ、俺のから揚げがピーマンの下に埋もれて」

目の前で繰り広げられる喧嘩に、開きかけた口を静かに閉じた。この空気の中で発言できるほどの度胸を僕は持ち合わせていない。うん、これは騒ぎが納まるまで沈黙あるのみだね。聞いている限りでは、喧嘩と言っても子供の言い争いみたいだけれど。

「お前ら、行儀が悪いだろう。もっと静かに食べられないのか」

ビシツ、と右手に持つ箸を突きつける美少女。鋭い眼光はまだまだ争いを続ける二人に向けられ、凄まじい迫力を持つていた。だがその頬には白いご飯粒が一粒ついていて、笑いを誘うとてもシュールな状態。はっきり言って台無しである。これはこれで可愛いけど。

「千歳も、人の事を箸で指すのは行儀悪いよ？」

「あ……そ、そうだな。環、すまない」

「いや、別にいいよ。俺は気にしてないし。あ、それと、右の頬にご飯粒ついてる」

「な、何っ……？ん……と、取れたか？」

「うん、もう大丈夫」

初雪のような白さを持つ美少女の頬に、羞恥の赤みが帯びていく。無表情は変わらず　と思っただが、僅かばかりに眉がしかめられていて。

「……っ」

僕の視線に気付いたのか、美少女はハツとして顔を俯かせた。長い前髪に、目元は完全に隠れてしまう。ただ、艶を持った黒髪から見える真っ赤に染まった耳が彼女の今の感情を表していた。

そんな表情も出来るんだなあ……とぼんやり思いながら、僕は過去の記憶を引っ張り出す。

恐らくは、ここにいる原因なのであるう出来事を。

## 第二話

それは一週間前の出来事だった。

大きな事件も事故もなくただ平穩で平凡な日常を過ごしていた僕を、非凡で非日常に限りなく近い何かに引きずり込んだきつかけ。

華やかな街明かりが輝く世界。行き交う人ごみにまぎれて、その中に溶け込む。誰も自分の存在を疑問に思わない、平和ボケした光景にうんざりとした溜め息をつきながら辺りを見渡す。頬を染めて笑い合う男女。微笑を交わす親子。獲物はいないかと目をぎらぎらさせた男。楽しげに電話をする女。

いつ見ても変わらない、変わる事のない景色。微かな失望を胸の内に潜め、目を上空にやった。空は濃紺に染められており、雲に隠れて星ひとつ見えない。それを見てどうしてか、鼻の奥にツンとした刺激が走る。

その時。

「あ……」

しまった、と苦渋くじゆに満ちた声が耳に入った。胸部わすに僅かな衝撃を受けた事に気付き、彷徨さまよわせていた目を向ける。

道端に転がる帽子に目を奪われ、次いで目に入ったのは絹糸のような髪。ネオンに照らされるそれは、少女の腰ほどにまで伸ばされている。怯えたような二つの紅玉くま。長いまつげで縁取られた瞳。

全身が粟立あわたつ感覚。呼吸するのを一瞬忘れ、目のありえない現状に目を見開いた。

この少女を、僕は知っている。

日宮千歳。自分と同じ学校に通う、同い年の同級生だ。だが、僕が彼女を知っている理由は、それだけじゃない。

一年前　世界屈指のエリートが集まるピアノコンクールで、まだ無名だった彼女が他の追隨を許さぬ勢いで一位の座を搔つ攫ったのが全ての始まりだった。

ピアノだけに収まらず、テニスやフィギュア、弓道など様々な舞台に現れては勝利と栄光を手にしていく。その姿に世間が注目し始め、メディアは彼女を大々的に取り上げた。

それだけでも充分に目立つ要素なのだが、日宮千歳には更なる要素があったのだ。

全国でも有数の成績を修め、加えて人目を惹く容姿。スラリとした長身は、モデル体系とでも言った方がいいのだろう。世間で公表しているプロフィールにはイギリスの血を持っているらしく、それで目が紅いのだと。

頭脳明晰な上に多才を持ち合わせ、更には無表情と言えども絶世と言える美貌を持つ彼女を、国民的アイドルと言っても過言ではない。

だから、こんな街中で堂々と顔を晒すのは自爆行為にも等しい訳であって。

周りのざわめきを敏感に聞きとり、僕の脳内ではみつつの選択肢が突きつけられていた。

その1、知らないふりをして立ち去る。

その2、サインを求めてみる。

その3、帽子を拾ってあげる。

いや、2はダメだろう、空氣的にさ。1もなあ……今更知らないふりは出来ないだろう。何せぶつかってるんだし。3もなあ……。どれも微妙な選択肢ばかりだよ。

ざわめきが段々と色めきたってくるのを肌で感じ取りながら、どうするべきか考えようとした所。

手首を掴まれ、体が人ごみと反対方向に引つ張られる。

「はいっ？」

「いいから走れ。私についてこい」

騒がしくなった人ごみの声を背にして、現状を理解しようと頑張ってみた。うん、とりあえずは今の状況を整理しよう。

日宮千歳は、僕の手首を掴んで前を走っている。驚くべき速さについていくのが精一杯である事は目をつぶろう。うん。

はつきり言っただけで現状に理解が追いつけない頭でぼうっと考えていると、突然前を走っている彼女が急停止し、こちらを向いた。いきなり止まられてもこっちはそう簡単には出来ない。ぶつかると思っただけで日宮千歳が手を出して受け止めてくれたのでセーフ。ありがとう、と息切れまじりに呟くと、別に、という言葉が返ってきた。

首を回して辺りを見れば、現在地は路地裏であるようだ。人は見当たらず、僕たち二人だけ。友人に見つかったらマズいだろうな、と思いつつ、ぼそぼそと紡がれる彼女の声に意識を集中させる。

「お前……同じ学校だよな？」  
向坂先輩まきさか いや、汐先輩しほの弟だろ

「うっ？」

「え、あ、まあ、そうだけど」

一体どうしたのだろうか。って言うか普段着なのに、よく僕が同じ学校って分かりましたね。日宮千歳は全学年の生徒の顔を覚えていたのだろうか。すげえ。マジで尊敬します。

「……何を思っているのかは知らないが、お前の事を知っているのは友人経路だ」

「あ、そうなんだ。……って、僕、顔に出てた？」

「……なんで知っているんだろう、と顔に書いてあった」

呆れたような溜め息を吐き出し、それよりも、と彼女は僕を見た。

「……いつまで抱き付いているつもりだ」

「え？ ……あ、うわわっ」

「ごめん、と慌てて離れば冷め切った目で見られた。怖い。

「す、すみませえん……」

「……まあいい。受け止めたのは私だ。今回の事でお前に非はないだろう」

「ど、どうも……」

「ん。それと聞きたいのだが、この辺でどこか身を隠せる所はないか？」

首を傾げられ、つられてこっちも首を傾げてしまった。何やら「ソトっぽくなってしまうた雰囲気の中、少しの間を空けて答える。

「この辺で？」

「ああ。今、ちょっとマスコミ連中に追われて……。この時間だとまだ家の前にいるだろうから、どこかで時間を潰してから帰りたいんだ」

「はあ……。なるほど」

有名人も大変である。下手すれば、プライベートまでをもなくしてしまうのだろうから。その中には勿論彼女も含まれている。

右手の腕時計を見、思い当たる場所を脳裏で思い浮かべる。時間は……。まだ大丈夫か。よし。

「日宮さん」

「む？ 何だ？」

「とりあえず、僕の従兄がやっている店に行こうか。今の時間なら準備中で誰もいないよ」

「……。いいのか？」

「うん」

申し訳なさそうな声音に、苦笑が漏れる。あの人なら、快く受け入れてくれるだろう。その様子が簡単に想像出来る事を苦々しく思いながら、自分が被っていたキャップを彼女に差し出す。

「これは……？」

「さっき、帽子落としてから。目立たないようにしてたのかなーっと思っただけ」

「い、いいの……か？」

「いいよ。僕のでよかったら、だけど」

「あ、ありがとう」

戸惑ったような目が、こちらチラチラと窺っている。遠慮がちな

手にキャップを乗せ、微笑んで見せると彼女は顔を背けた。

この瞬間、僕は日宮千歳が自分と同じ十六歳の少女である事に気が付いたのだ。

### 第三話

キャップを被った日宮さんを連れ、街を歩く事数分。黒のカーゴパンツに淡い水色のパーカーという日宮さんの格好はまるで少年のようであったが、それがまた可愛らしくてお母さんどうしましょ。……まあ要するに、僕のキャラを崩壊させるほどの威力を持っているのだ。

思わず愛でたくなる。そんな事を思いつつ目を動かせば、こちらを仏頂面で見ると彼女と目が合った。

「……こっち見るな。前向いてろ」

こういう一言までいちいち可愛らしい。テレビで見る姿は綺麗とかカッコいいとか思っていたけど、実物と話しているとそうでもなかって分かった。いや、綺麗には綺麗なただけどさ。とにかく言動が可愛いんだよ。

「あ、ここだよ。日宮さん」

「ここか　って、バーじゃないか。私は未成年だぞ」

「いや、僕もだから。それに、お酒を飲みに来た訳じゃないって。ジュースもちゃんと置いてあるしさ」

「む。そ、そうか……」

そうだよな、と口にしつつも、木目調の扉を開けようとしないうちまだ躊躇しているのだろう。仕方なしに、彼女の横から腕を伸ばして扉を押す。

あ、という呟きは聞かなかつた事にしましょう。

店内に足を踏み入れれば、お目当ての人物はすぐに見つかった。

カウンターに背を預けてグラスを拭く後ろ姿は、間違いなく従兄だ。

「あ、ごめんなさーい。うちは今」

音もなく振り返ったその顔の、なんとまあ整った事。本当に血が繋がっているのか疑いたくなる。驚いた顔も美形なら使いこなしてしまうのか。

「なんだ、秋か。珍しいじゃん、お前がこっちに来るなんて」

しかも女の子まで連れてきて。

ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべる従兄に、呆れを通り越して諦めの感情を抱いた。何でもかんでもそっちの方向に持って行きたがる悪い癖だ。

「それで？ お嬢さんは俺の可愛い従兄弟とどこまで進んだのかな？」

「え、あの、えっと……。ど、どこまでって……。どこまで？」

「いや、どこも進んでないからね？ タケちゃんも、変な質問やめて」

非常に言いにくい日宮さんの問いに頬を引きつらせ、とんでもない質問をしてくれた従兄を睨みつける。初対面でそれ言っか、普通。

「はいはい、悪かったって。ちょっとふざけすぎた。……んで、お前らは何しに来た訳？」

ニコリと爽やかな笑顔を浮かべるタケちゃん。さすが人気バーテンドー。この笑顔で何人も女性の虜こころにしてきたのだろう。中身はちょっとアレだけでも。

「タケちゃん、開店時間までここにいていいかな？ お客さんが来る前に帰るからさ」

「なんだ、そんな事か。いいよいいよ、好きなだけどうぞ」

「うん、ありがとうタケちゃん」

「あ、でもその前に」

チラリと僕の隣の彼女へ流し目を向けて。

「その可憐なお嬢さんの名前、教えて欲しいな？ その野暮ったい帽子を脱ぎ捨ててさ」

キラリと光る白い歯。爽やか度が大爆発だが、身内としては痛すぎるその姿に目も当てられない。ああ、なんて恥ずかしい奴なんだ。

「……日宮さん、どうする？」

「まあ……正体をバラしても別に問題はないだろう」

そう言つが早いか、日宮さんはキャップを取って頭を下げた。

「日宮千歳です。初めまして。向坂くんとはつい先ほど、道端で知り合ったばかりの仲ですが、よろしくお願いします」

「……」

タケちゃん、口、口。半開きどころじゃないよ。顎が外れるんじゃないかってほど開いてるよ。だらしないから早く閉じなさい。

「……秋、俺は、夢を見ているのだろうか」

「しっかりしてよ」

「しっかりしてください」

まったく、と呆れた視線を向けるのは僕と日宮さんを合わせての二名だけ。

「ん。このケーキ、美味しい」

開口一番に出た日宮さんの賞賛の言葉。タケちゃんは嬉しそうにだらしなく笑った。

実はタケちゃん、お菓子作りが趣味である。日宮さんの口に運ばれていくチーズケーキもタケちゃんが今日の朝作ったものだからか。

「しかし、日宮さんも大変だね。マスコミが家の前で見張ってるんだって？」

「あまり気にはしていないのですが、こう何ヶ月も続くとなるとうんざりします」

僕と話していた時とは打って変わり、日宮さんは敬語だ。礼儀作法や上下関係を気にする人なのだろう。改めて尊敬する。

チーズケーキの最後のひとかけらを口に放り込んで、もぐもぐと咀嚼する大変微笑ましい日宮さんを見つめつつ、タケちゃんがサービスしてくれたコーヒーに口づける。バーにコーヒーがあるのか、と聞いたらなんとタケちゃんが飲む為に置いてあるらしい。もう完全に私物化している事はツツコンでもいいのだろうか。……いや、面倒だからやめておこう。

「あ……もうそろそろ開店しなきゃな」

タケちゃんのその眩きに、ぼうつとしていた意識が覚める。

「もうそんな時間？」

「ああ。さーとと、これから朝まで働き詰めだなー」

「じゃあ、僕たちも帰ろうか。ありがとね、タケちゃん」

「ありがとうございます」

「日宮さん、また気が向いたら来てよ？」

「はい、時間が空いたら、また」

それじゃあ、と言って僕たちはタケちゃんに背を向けた。

扉を開けたその先は、ネオンの明かりとに暗闇に包まれる春の夜。

## 第四話

何事もなく街中を抜けて、人通りの少ない住宅街を日宮さんと歩く。

「……そう言えば、日宮さんの家ってどこ？」

「あれ」

「え？ あれ？」

日宮さんの指は空中に向けられており、その先には周囲のマンションの中でも一番の高さと大きさを誇るものだった。……でかすぎじゃね？

想像以上の物件に目を奪われていると、隣から肩を叩かれた。

「向坂、ここがいい」

「え、ここ？ もう暗いし家まで送るよ？」

「いや、いい」

「でも……」

「マンションの前にはマスコミがいるんだ。それで、お前と私が撮られたらどうする。そのせいでネットに個人情報が出るハメになるかもしれない」

だからいい、と日宮さんは強い意思を持った目で僕を見た。

「今日の事は感謝している。だが、私とはこれ以上関わらない方がいい。学校で会っても、私に話しかけるな。……分かったか？」

「日宮さん、優しいね」

「はぁ？」

無表情が困惑したものに代わり、訝しげな目を向けられる。頭おかしいんじゃないのかコイツ　まるでそう言わんばかりの顔だ。

ああ、この子は自分の優しさに気付いていないのか。

「私は優しくなんか」

「優しいよ、日宮さんは」

「優しくない。私は、自分勝手な人間だ」

ああ、もう。

「周りに迷惑かけないように　って、そう思ってるでしょ？　そんな所が優しいんだってば」

「思ってるない」

「嘘」

「……お前、意外と頑固だな」

「日宮さんこそ」

「……くっ」

「……ふっ」

二人で一瞬だけ睨み合い、すぐさま堪えきれずに吹き出した。お互い同じタイミングで。

「くっ、ははっ。さ、向坂、お前……変な顔してたぞ……くふっ。

わ、笑わせるなよ……っ」

「ひ、日宮さんこそ……ははっ。無表情でじっと見るのはやめてよね……っ」

「あ、あれでも精一杯睨んでただぞ……ふはっ。それを言うならお前だって」

お互いのおかしかった点を挙げ、近所迷惑にならないよう忍び笑いをする事、約数分。

ようやく落ち着きを取り戻した僕らは、まだ笑みの残った顔で向き合っていた。

「お前のような奴は初めてだ、向坂」

「それはどうも」

「変な奴だと汐先輩から聞かされていたが、実際会ってみると予想以上に変わった事には驚いたぞ」

「それヒドい……。っていうか日宮さん、汐姉しおねえと知り合いなんだ」

「まあな。……。さあ、もう遅い。お前には家で待ってる家族がいるだろう？ さっさと帰れ。私はここでいいから」

「仕方ないね。じゃあ、今日はここまで、という事で。次はちゃんと家まで送るからね？ それじゃっ！」

「次って あ、おい！」

次の機会。その可能性を否定される前に逃げ去ってしまおうと、日宮さんの返事も聞かずに走り出す。制止の声に止まろうとする足を無理やり動かして、距離を進める。

「おいっ、向坂っ!!」

焦りの混じる声。

「向坂つてば! ああ、もう!!」

その中にほんの少し、苛立ちが混じって。

「 秋! 」

「　　っ!？」

これには、さすがに足を止めるしかなかった。振り向けば、してやったりと不敵に笑みを浮かべる日宮さんが目に入る。その手に持つのは、見覚えのあるものだ。

「帽子! どうするんだ!？」

「日宮さんに、　　千歳にあげるよ!」

走り出した足は止まらない。多分、今の自分は今までにないくらい楽しそうに笑っている。

轟々《ごうごう》と唸る風の中、ありがとつと言つ声、聞こえたような気がした。

## お知らせ

たくさんさんの評価・感想ありがとうございます。とても参考になる意見ばかりで、助かりました。

中にはどっちも気になる、と言ってくださった方々もいて、心が何だかほっこりしています。温かい。冷え性も吹き飛んでしまうほどの温かさだよ。

ああもう、みんな大好きだ。ひとりひとりに熱い抱擁を贈りたい。拒否されるだろうけど。

それであれから、よく考えてみました。

興味深い意見もあり、それをピックアップしつつ文字を埋めていくという作戦ですごめんなさい。

・前作と性格が違う。

はい、いきなり来ましたこの問題。作者も気付いてはおりませんが、改訂版は誰だよお前状態です。特に千歳。

これは原因がはっきりしてません。前作の千歳は当初クールで無表情だったけれども、最近はヤキモチ焼きで結構感情豊かですよね？ それ〃千歳と作者の脳内はそうインプットされているようで、無意識にそんな千歳を書いていましたごめんなさい。

思いつきり前作を引きずってますねごめんなさい。

とりあえず対処法として、改訂版の千歳にはこれからクールにしていきます。ギャップ萌えに弱い作者の嗜好を理解して頂けたら嬉しいです。

・千歳のキャラが……。

変わってますね、はい。クーデレには変わりないけれども、どこか違いますよね。

改訂版を書いていく内に軌道修正していくつもりです。

やはり千歳はドSで無表情でクーデレじゃないと！　そんで徐々にヤキモチ焼きな部分を見せていくのさ！

・前作も改訂版も気になる。

最終関門のお出ましだよおおおお！

恐らくこうなるだろうなあ、とは薄々思っていました。

だって千歳は性格違いすぎて別人みたいだし、秋は秋で今のところヘタれてないもの！

千歳のS攻め×秋のヘタレ受けが前作の売りだった事は言うまでもないでしょう！（え

しかし何たる事か！　改訂版ではまるで秋攻め×千歳受けみたいではないか！（え

絶望した！　自分の再現力のなさに絶望した！　何をどうしたらあそこまで物語を変えられるのか！

……よし、少し落ち着こう、自分。

まあとにかく、前作と改訂版、どっちを書いていくのかって話ですよね？

正直言って何も考えてません。

言い訳するようで申し訳ないのですが、作者は現在インフ・ル・エーンザさんと夢の世界へ旅行中で思考能力が生まれたばかりのミアキヤット並みに低下。とにもかくにも、関節バキボキバキボツキです。自分でも意味わかりません。末期ですね、それはわかりません。

もう関係ない事ばかり書いてますね、すみません。

……とまあ、そんな感じで脳内の細胞さん達と会議した結果。

『前作も改訂版も連載していけばいんじゃないかね？』

という事になりました。

同時進行、はっきり言って難しい。特に改訂版。あれお話を丸々変えてますからね。

でも、やっぱりそれがいいかなーっと思ったので。

前作の方が好きと言ってくださる方もいるようですし。

前作は前作で楽しんで、改訂版は改訂版で楽しめばいいのではないのでしょうか。

まあ、ですよ。

姫も姫・改も読者様の愛で成り立っているのでノープロブレム！

でもしばらくは連載停止の処置をとります。

連載開始は4月くらいになるかと。

受験生の文字が痛いこと痛いこと。

まったく勉強してないのによく言うわー、あっはっは。

評価・感想のお返事はまた時間が出来た時、一気に返信します。  
これからまた勉強なので。

とりあえず、第一目標として前作の完結を目指します。

改訂版はそれからだよね、やっぱり。

あ、このお知らせは改訂版の次話が出来るまで載せておきます。

ではでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0538g/>

---

姫と三騎士と平民A【改訂版】

2010年10月9日22時26分発行